東海地方における近代地域医療の形成と西洋医学の受容（1）

－新たに発見された医療関連資料の考察から－

黒　野　伸　子
石　川　　寛
大　友　達　也

研究紀要第 54 号　抜粋

岡 崎 女 子 大 学
岡崎女子短期大学

令和 3 年 3 月 15 日発行

【研究論文】

東海地方における近代地域医療の形成と西洋医学の受容（１）
－新たに発見された医療関連資料の考察から－

黒野　伸子*　石川　寛**　大友　達也***

要　旨

明治期は、西洋医学を基本とした新たな地域医療形成が進んだ時代である。本稿では、筆者らが新たに発見した医療関連資料を参照しながら、東海地方における近代地域医療形成と西洋医学受容の様子を「医家」「患家」の両視点から明らかにすることを主な目的とした。その結果、近代地域医療は明治後期にほぼ形成され、病診連携や、紹介なども行われていたことが示唆された。地域住民は西洋医学を受け入れており、生活様式などにも取り入れていた。今後は、東海地方に分散する資料を整理統合し、地域医療形成過程の解明をさらにすすめていきたい。

キーワード：近代地域医療、西洋医学、小寺家文書、

Ⅰ．はじめに

1．新たな医療制度の始まりと感染症流行

明治維新後、わが国はドイツ医学を基礎とした医学の近代化に着手した。明治４(1871)年、欧米での医学・医療分野を視察した長与専斎は、衛生概念普及の重要性を痛感し、帰国後、医事衛生に関する法規の整備に取り組んでいる。当時の日本には、公衆衛生、衛生行政の概念は存在していなかったため、長与は「衛生」の概念を知ったときの驚きを自伝に記しているほどである[1)]。

明治期、地域住民の生活環境は決して良好とは言えず、加えて、感染予防の概念も知識もないため、地域は、常に感染症蔓延の危機にさらされていた。竹原(2006)は、明治10(1877)年に発生したコレラ流行時における地域住民の動きをまとめているが、国の実施した予防措置は「未知」への恐怖と誤解によって地域住民の強い抵抗に遭っている[2)]。衛生概念が浸透している現代であっても、未知の病に対する恐怖から、多くの事件や問題が発生している。新型コロナウイルス(COVID-19)感染拡大に伴い、国は多くの感染予防対策を行ったが、法律上ロックダウンが実施できないため、市民は自粛生活を余儀なくされた。その過程で、自警団のような組織が起こり、他人に対する干渉にまで発展している。当銘(2020)によれば、「執拗すぎる相互監視」の問題について、「その心情は『よかれと思って』でしょう。国が呼び掛けている方針に『みんなで従いましょうよ』というのが出発点にある。」とし、過去に学ぶべきだとしている[3)]。

以上のように、新たな制度が浸透する過程では、「行政、医療関係者」と「地域住民」の葛藤が必ず起こる。地域指導者による規範行動や有志による啓蒙活動を媒体として、地域住民の行動変容が現れ、やがて受け入れられていく(図 1)。明治期は、「行政、医療関係者」「地域住民」ともに多くの問題を抱え、葛藤と相克に見舞われながらも、西洋医学を基本とした新たな地域医療形成へと進み、現代に繋がっていく時代であるといえる。筆者らは、明治期を「地

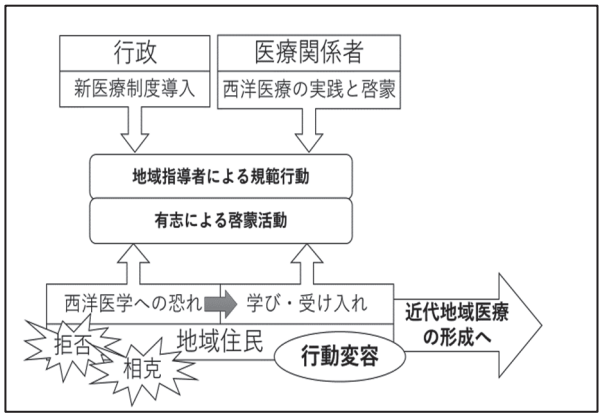

図１：近代地域医療形成概念図(筆者作成)

*岡崎女子短期大学　　**名古屋大学　　***就実短期大学

域医療の原点」と位置づけ、研究を進めることとしたい。

2. 明治期の病院事情と診療報酬

近代地域医療が西洋医学を基礎として発展した背景には、医師会の設立とその活動が大きく関わっている。そのひとつが医療費の標準化であった。現在、健康保険下での医療費は「診療報酬」とよばれ、公定価格である。物価の違いは「地域加算」等で調整し、どの地域で医療行為を受けても価格は変わらない仕組みが作られている。

診療報酬制度の源流は、明治期に各地域の医会が定めた医療費一覧表にある。その根底には、「医療費支払いの現金化」と「定期的な徴収」がある。明治に入り、わが国には病院という民衆には全く未知の医療施設が作られるようになった。代表的な病院として「東京府大病院」「神戸病院」「函館病院」などがある。その設備は十分ではなく、病院経営の健全化や医療技術向上のための資金確保が必要だった。しかし、わが国では、何世紀にもわたり盆と年末にしか支払いをしない「盆暮れ勘定」が行われていた。このような状況に対し、久留米市の好生病院が明治(1875)年に「現代薬価表」を作成し、地域の代表者(区・戸長)に医療費を現金による支払いにしてほしい旨の依頼をしている。青柳(1996)によれば、「医療費を盆暮れの物品ですます慣習」を現金で支払う方式に転換することの理解を地域に求めたものであろうとしている[4)]。このような動きはまさに近代地域医療発展への嚆矢といえる。

明治10年代になり、各地に医会が設立され、独自に医療費を作成していくようになる。当時は医師が患家に赴いて診察する受診形態であったため、診察料のほか、往診料が必ず設定されていた。名古屋市医師会が明治 33(1900)年に制定した医療料金には、「自宅診察料 20 銭以上」「往診料 30 銭以上」のほか、「至急往診料 50 銭以上」「深夜往診料 1 円以上」など現代の加算に相当する考えも示されており、興味深い。この価格設定が妥当かどうかは、別の機会に論じることとするが、地域住民にとっては決して安くはなかったようだ。地域は異なるが、明治37(1904)年の調査によると、岡山県における小作農の年間収入は 31 円 45 銭であった[5)]。深夜の往診は1円20銭以上にもなり、医療費の家系に占める割合は大きい。地域によって料金にはばらつきがあるが、大差はなく、民衆にとって、医療費を捻出するのは至難の業であっただろう。

Ⅱ. 研究目的および研究方法

1. 研究目的

本稿では、筆者らが 2019 年 9 月から 2020 年 8 月にかけて岐阜県大垣市、愛知県新城市、岐阜県各務原市で新たに発見した医療関連資料を参照しながら、東海地方における近代地域医療形成と西洋医学受容の様子を明らかにすることを主な目的とする。なお、本研究は、今後、近代地域医療の形成過程を検証し、東海地方に伝わる医療資料統合のための基礎研究として位置づけるものである。

2. 研究方法

近代地域医療形成と西洋医学受容の様子を明らかにするためのアプローチは「医療提供者からの視点」「患者および家族の視点」の両視点から行う。本稿では、「医療提供者」を「医家」、「患者および家族」を「患家」と記す。使用する主な資料は以下のとおりである。

なお、岐阜の地域医療発展には江馬家を考慮に入れる必要があるが、本稿では新たに見つかった資料を中心として考察し、大垣蘭方医とのつながりは続稿にて論ずることとしたい。

(1)医家の視点

『信玄病院資料』設楽原歴史資料館蔵
2019 年 12 月筆者確認

『明治の医塾生　馬渕良三日記』天野晴子編
2020 年 8 月筆者確認

(2)患家の視点

『小寺家文書』個人蔵
2019 年 9 月筆者確認

3. 小寺家文書の資料価値

本稿では、患家からのアプローチに小寺家文書を使用する。医療資料としての価値の高さは、黒野、石川、大友(2020a、2020b)に詳細を記しているが、本稿の内容に係る部分を一部、以下に抜粋する。

小寺家文書は岐阜県大垣市の小寺登氏が所蔵する資料群である。小寺家は、美濃国石津郡時・多良郷(現在の岐阜県大垣氏上石津町域)を支配した旗本高木家の旧家臣の家筋にあたる。

(中略)

整理にあたっては、近代の衛生や医療に関する資料が 100 点程みつかったので、「5 家族」の中に「(3)衛生医療」の小項目を設けて細分した。効能書や処方箋、種痘証明書、診療明細書、富山の売薬商や婦人病薬に関する資料、家庭薬報、受診券などがあり、年代が判明しているもので明治 7(1874)年から昭和 21(1946)年に及んでいる。また、「6 書状」の中にも病状に言及した書状が散見する。

小寺家文書には、「衛生医療」に分類される資料のほか、当主小寺弓之助とその家族で書き継がれた日誌が伝わっている(図 2)。「受診」「通院」「種痘」「薬剤購入」「医療費支払い」などの医療行為に直接関係する記録のほか、「見舞い」「看護依頼」「入院にまつわる行動」など医療行為の周辺に起こった多くの行動が克明に記されている。その記述は『日誌』という表題通り、感情を交えず、簡潔な文体で記されており、明治後期の生活様式、行動が鮮明に読み取れることができ、総じて小寺家文書は「患家の視点」で東海地方の医療を俯瞰できる好資料であるといえる。なお、本稿では日誌を『小寺家日誌』と記す。

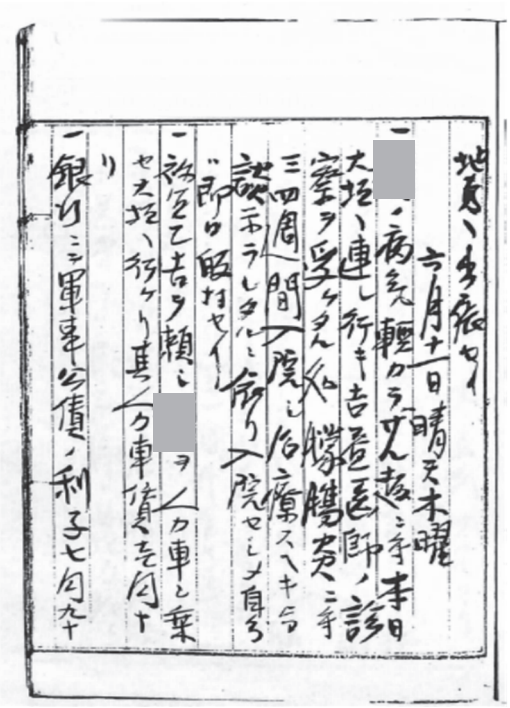

図 2：小寺家日誌の一部
明治 41(1908)年 6 月 11 日
画像提供：小寺登氏
一部に画像処理を施した

Ⅲ．近代地域医療形成に貢献した東海地方の医家

1．多良村の村医・西脇家(岐阜県大垣市)

西脇家は、近世には美濃国石津郡時・多良郷(現在の岐阜県大垣市上石津町域)を支配した旗本高木家に仕え、近代には村医として地域医療に従事した[(1)]。主家であった旗本高木家は、西高木家・東高木家・北高木家の三家からなり、いずれも多良郷宮村に陣屋を構えた。宮村は明治 22(1889)年の合併により多良村の大字となり、昭和 30(1955)年に牧田・一之瀬・時村と合併して養老郡上石津村を形成、上石津町を経て、平成 18(2006)年に大垣市と合併した。西脇家は多良郷宮村(多良村宮)にあり、友輔が東高木家の侍医を務めた。

宮村の庄屋の家に生まれた西脇友輔とその兄秀挺(はじめ秀策)は、共に大垣の蘭方医江馬家の門人であった。江馬家は大垣藩医の家柄で、蘭斎(延享 4〈1747〉～天保 9〈1838〉)が江戸で蘭方医学を修業、帰垣後に蘭学塾の好蘭堂を開設した。蘭斎後は松斎(安永 8〈1779〉～文政 3〈1820〉)、活堂(文化 3〈1806〉～明治 24〈1891〉)と続き、多くの医学者を育てた[(2)]。

秀挺は天保 6(1835)年、友輔は天保 15(1844)年に江馬家に入門した。多良郷からは西脇兄弟の他に、西高木家の侍医であった土屋春怡家の謙蔵が秀挺と同じ年に門人となり、遅れて元治 2(1865)年に渡辺養宅が入門している。秀挺は医師の許可を得た後、岐阜に住み、嘉永年間(1848～54)に岐阜種痘所を設けて美濃における種痘の実施に尽力した。西脇家に残る種痘録[(3)]をみると、嘉永 7(1854)年 5 月から 8 月にかけて、上石津町域にあたる地域で 82 人の小児に種痘を実施しているのが確認できる。秀挺は若くして江馬家の留守居を務めるなど将来が期待されたが、安政 3(1856)年 4 月に 37 歳で死去した。

東高木家の侍医を務めた友輔は、維新後は多良で医療に従事し、明治 20(1887)年に死去した。家督は長男の耕太郎が継いだ。耕太郎は明治 13(1880)年 6 月に岐阜県医学校を卒業し付属病院に勤務していたが、父が亡くなると「友輔」と改名して村医となった。

西脇家は、小寺家の近くに居を構えており、ホームドクターの役割を果たしていたようである。日誌にも西脇の名が多く見受けられる。小寺家に伝わる領収証には、「西脇薬舗」と記載されたものがあり、処方薬も出していたことがわかっている。

2. 医塾好古堂・大野家（岐阜県各務原市）

好古堂は、美濃国各務郡那加村（現岐阜県各務原市桐野）に存在した医塾で、主宰は内外科医大野春道である[4]。大野春道は医師の家系に生まれ、江馬塾に学んだ。息子の大野啓一郎が後を継いでいるが、現在は閉院している。好古堂についての資料はまだ発見されておらず、多くを知ることはできないが、塾生であった馬渕良三の記した日記が伝わっており、明治から大正期にかけての医学教育や医学生の生活を窺い知ることができる。馬渕は明治20（1887）年に14歳で入門し、春道の元で医学を修め、のちに済生学舎に 26 歳で入学し医術開業試験に合格、明治41（1908）年に木曽川町黒田で開業した。

『馬渕良三日記』によれば、好古堂の医療は「貧しい人にはより丁寧に接する、薬代が払えない人も同等に診察する、平生から頭を低くせよ、医者は議員にはなるな[6]」という理念の下で医学教育を実施していた。塾生は質素倹約を旨とした生活スタイルであったようだ。塾の傍らには大野病院が併設され、塾生は患者の治療にあたりながら医療技術を学んでおり、現代のBSL（Bed Side Learning）を実施していたことがわかる。

3. 吉益病院・吉益家（岐阜県大垣市）

明治41（1908）年5月27日から12月6日まで小寺家当主の長女が虫垂炎で入院し、手術を受けた病院である。院長の吉益雄太郎は、1700年代に活躍した江戸時代の代表的な漢方医である吉益東洞、南涯を祖とする医家の家系に生まれた。京都府立医学校（現京都府立医科大学）で外科を専攻し、母校で教鞭をとったのちドイツに留学、帰国後の明治41（1908）年に岐阜県大垣市で吉益病院を開設した[7]。外科を専攻しているところから、執刀は雄太郎であったとみてよい。

雄太郎は、好古堂主宰大野春道の息子啓一郎、塾生馬渕良三とも交流があり、情報交換なども行っていたようだ。雄太郎の息子脩夫（しゅうふ）は、東京帝国大学医学部（現東京大学）に学び、精神科医となった。「犯罪生活曲線」の開発者でもあり、犯罪学の創始者である。

4. 信玄病院・牧野家（愛知県新城市）

牧野家は、代々三河吉田藩の藩医をつとめる家柄であったが、文斎の祖父が現在の新城市八束穂に居を構え、以来、東三河地域の医療に貢献してきた。牧野家は代々「文斎」を襲名しており、明治後期に活躍した文斎は3代目にあたり、明治42（1909）に信玄病院院長となった。信玄病院は現在の愛知県新城市竹広にあった総合病院で、過去、長篠・設楽原の戦いで決戦地になった場所である。近くには戦没者を埋葬したとされる塚があり、「信玄塚」とよばれているが、これを病院名にしたものであろう。現在の地名にも「信玄原」としてその名が残る。病院規模など詳しいことは今後の研究に俟たねばならないが、地域医療を支えた病院であったことは間違いない。

Ⅳ. 医家の視点から考察した近代地域医療の形成

筆者らが参照した医療に関する資料から、東海地方で活躍した医家の概要を図3、図4にまとめた。明治後期に新たな医療施設が開設されており、明治40年代以降に西洋医学の継承がほぼ完了したことが推測される。

院長名	名称	院長就任時期	所在地	規模
大野啓一郎	大野病院	明治38（1905）年就任	岐阜県各務原市	病床数20床、総合病院
吉益雄太郎	吉益病院	明治41（1908）年開設	岐阜県大垣市	病床数38床、総合病院
西脇友輔		明治13（1880）年頃～	岐阜県大垣市	在村医、種痘医
西脇郁	西脇医院	明治41（1908）年開設	岐阜県大垣市	診療所
馬渕良三	馬渕医院	明治41（1908）年開設	岐阜県一宮市	診療所
牧野文斎	信玄病院	明治24（1891）年就任	愛知県新城市	病床数不明、総合病院

図3：近代東海地方の医療提供施設
筆者作成

病院名	所在地	設立年	院長名
林病院	郡上郡八幡町	明治36年7月	林　吉蔵
郡上病院	郡上郡八幡町	明治39年4月	田中健吉
大野病院	稲葉郡那加村	明治38年8月	大野啓一郎
高山病院	大野郡高山町	明治45年7月	千葉泰一郎
中津川病院	恵那郡中津町	明治45年7月	平尾　猛
岐阜病院	岐阜県金宝町	明治31年3月	渡邉柳吉
多治見病院	可児郡豊岡町	明治45年3月	奥村鐵太郎
小坂病院	岐阜県秋津町	明治39年6月	小坂慶二
吉益病院	大垣市竹島町	明治41年5月	吉益雄太郎
回天病院	土岐郡土岐津町	明治12年12月	遠山道榮

図4：岐阜県私立病院（抜粋）
（大正15〈1926〉年現在）
出所：岐阜県編集（2002）『岐阜県史』p. 627
より筆者作成

1. 近代地域医療における病診連携

明治期の医療は、在村医が地域住民の元を訪れるか通院によって医療を提供し、入院治療が必要な場合、病院に行く、という現代の病診連携にあたる仕組みが既にできあがっていた。入院医療を担っていたのは、大野病院、吉益病院、信玄病院のような総合病院であった。小寺家日誌に病診連携の記録が残っており、入院までの流れを読み取ることができる。

以下に翻刻を示し、考察する。原文は縦書きである。患者名はAとした。年代はすべて明治41(1908)年である。

【資料1】※下線筆者
5月27日　雨天　水曜
弘とAと西脇友輔方へ行き、弘は先の通水薬一び貰ひ、Aはモウチョウエンにて水薬と散剤とを三日分、こーやくを一かいと貰ひたり

5月30日　曇天　土曜
A義西脇友輔方へ行キ診断ヲ受ケ水薬壱瓶、散薬三日分、弘ノ水薬一瓶貰ヒ来レリ

【資料2】
6月11日　晴　木曜
Aノ病気軽カラザル趣ニ付、本日大垣へ連レ行キ吉益医師ノ診察ヲ受ケタル処、朦腸炎(もうちょうえん：筆者注)ニ付三四週間入院シ治療スヘキ旨談示ラレタルニ依リ入院セシメ、自分ハ即日帰村セリ

【資料1】では、Aが西脇友輔のもとで外来治療を受けていることがわかる。5月の段階で盲腸炎(虫垂炎)の診断がなされており、しばらくは薬剤治療で凌いでいたようだ。明治期に実施されていた薬剤療で用いられたのは、「甘汞下剤(塩化水銀)」「大黄剤」「塩類下剤」「リチネ(ひまし油)」などの下剤、莨菪越幾斯(ろうとうエキス)膏」「イヒチオール軟膏(イクタモール軟膏)」「阿片」等、下剤や痛み止めで対処療法を行っていた[8]。症状が思わしくなかったため、吉益病院に受診し入院となっている【資料2】。

紹介等の事実は記されていないが、退院後の外来フォローアップも西脇が実施していることが退院後の日誌に記載があることから、入院に西脇が関わっていたことが推測される。

2. 西脇の活躍と西洋医学の普及

明治9(1876)年に天然痘予防規則が制定され種痘が義務化する中で、西脇友輔・耕太郎(友輔)は、地域の種痘医として活躍した。『新修上石津町史』には「種痘医　西脇友輔」が発行した種痘接種証明書の写真が掲載されている[9]。これは明治15(1882)年頃の証明書と思われるので、西脇友輔のものである。一方で、近世に西高木家に仕え、西脇家と同じ多良村宮に住む小寺家には、「医師　西脇友輔」が発行した種痘接種証明書5通が伝わる[(5)]。これは明治23, 26, 30年の証明書なので耕太郎(友輔)の時代である。ちなみに、小寺家の当主弓之助は天然痘が流行した明治30年に妻・長女と共に臨時接種していたが、彼は生まれた年にも種痘を受けていたことが前出の種痘録に記されている。

当該期の多良には、西脇以外の種痘医として、中原養元、川地治左衛門、川地玄寿がいた。このうち中原養元は西高木家の侍医であった。幕末の西高木家では、侍医の土屋・中原家の他に、大垣の江馬家や飯沼龍夫(慾斎)からも薬を処方してもらい、治療をうけている。多良の地域医療を考えるとき、大垣蘭方医とのつながりを考慮に入れる必要がある。

小寺家日誌によると、明治41(1908)年2月21日条に「本日社務所ニ於テ種痘執行ニ付家内一統種痘ヲ為シ貰ヒタリ、其掛員ハ医師西脇友輔、区長代理西脇佳美、書記岡田長平ノ三氏ナリ」とあり、同月29日条にも「本日社務所ニ於テ種痘ノ点検ト共ニ「トラホーム」ノ検診アリタルニ付家内一同出頭、西脇医師ニ検診ヲ受タリ」との記述がみえる[(6)]。このころの多良村の伝染病対策は西脇友輔が担っていたようである。

西脇友輔(耕太郎)の次男が郁で、やはり岐阜県医学校を卒業後、多良村宮で村医となった。前出の小寺家日誌には、明治41年12月8日条に「西脇郁氏医術開業ニ付其祝トシテ金五十銭携帯ニ行キ饗応ヲ受ケ折詰ヲ貰ヒ来レリ」とあり、このころ代替わりしたのであろう。戦後には郁の長男である西脇文哉が西脇医院を開業した。

3. 吉益雄太郎が担った地域医療

吉益雄太郎は明治41(1908)年5月に大垣市で吉益病院を設立した。同年5月27日に小寺家当主長女が入院している。病院規模は大正15(1926)年の資料によれば、病床数38床、診療科目は全般、1年間の入院患者数は504人、外来患者数(新患)は2646人で

あった。岐阜県の私立病院の平均病床数は約 27 床で、最も病床の多かった中津川病院でも 44 床であった[10]から、吉益病院が地域の基幹病院であったことは容易に推測できる。

吉益は開業前にドイツ留学して先進医療を学んでおり、帰国後吉益病院を開設した。彼が開設地になぜ大垣の地を選択したかは明らかでないが、病院のあった竹島町はかつて大垣宿本陣のあった地で、水陸ともに栄えていたようである。辻下(1985)によれば、上石津一帯は、西伊勢街道にあたっており、伊勢参りの重要な通り道で、周辺の町も栄えていたようだ[11]。地域医療が発展した理由のひとつではないだろうか。しかしながら、わが国初の虫垂炎外科治療成功例は明治 32(1899)年であり、内科治療が中心であった時代に大垣市という一地域で手術を実施していたことは特筆に値する。治療内容の詳細は、患家に交付された「薬価及手術料明細書(以下明細書と記す)」と小寺家日誌に残された記録から読み取ることができる。以下に明細書の一部(翻刻)を示す。原文は縦書きである。

【資料 3】※下線筆者

【請求番号 9-103-12、分類番号Ⅲ-5-(3)-13】

明治四十一年六月　小寺せい　殿 薬価及手術料明細書

日／種目 種別　料金

自十一　日至十七　日　　薬価　壱円六十弐銭

自　　日至　　日　　温布帯　拾五銭

自　　日至　　日　　入院料　壱円五銭

自十一　日至　　日　　此所へ金五円預り

自　　日至　　日　　牛乳一升九合 六十六銭五厘

自　　日至　　日

差引金壱円五十一銭五厘　預りニ成

明治四十一年六月拾七日　　岐阜県大垣町　吉益病院

【資料 4】※下線筆者

【請求番号 9-103-8、分類番号Ⅲ-5-(3)-16】

明治四十一年七月　小寺せい　殿 薬価及手術料明細書

日／種目 種別　料金

自十　　日至二十二日　　薬価　壱円拾四銭

自　　日至　　日　　大手術　拾五円也

自　　日至　　日　　繃帯材料 六十八銭

自　　日至　　日　　浣腸　十銭

氷嚢　拾五銭

自十　　日至二十三日　　入院料　四円弐十銭

自　　日至　　日　　内壱円七十七銭五厘預分引

差引金拾九円五十九銭五厘　外ニ壱円四十弐銭

氷七十一斤

壱円五十銭五厘　牛乳四升三合代

明治四十一年七月廿三日　岐阜県大垣町

吉益病院□印

惣計弐十弐円五十弐銭

【資料 3】は入院時、【資料 4】は、虫垂切除実施前後の会計の様子を示したものである。会計はおよそ 7～10 日間を単位としており、診療項目別に医療費が記載されている。支払いは患家の預り金から差し引いて納付されており、「盆暮れ勘定」はおこなわれていない。明細書の記載から計算すると、入院料は、手術前 1 日 15 銭、手術後 30 銭で請求されていた。その他、使用された材料も明確な記載があり、明朗な会計システムであったことがわかる。明治期の手術料は「大手術」「中手術」「小手術」に分類され、それぞれに金額が設定されていた。「大手術」は主に全身麻酔下で行われた手術が対象であったようだ。これらの医療費は、大垣市医師会が定めた医療料金をもとにして算出したものであろうが、物納や盆暮れ勘定が一般的であった時代から現金支払いの時代へと移っていく過程が読み取れる。

4. 牧野文斎の地域貢献

牧野は、信玄病院の経営を成功させ新城市の地域医療を活性化させている。新城市設楽原歴史資料館が当該病院の「列設布篤(レセプト)[7]」「会計原簿」等の帳簿類を保管しており、その一部を 2019 年 12 月に確認した。特に、「列設布篤」は、患者の居住地ごとに分類されており、当該地域のみならず、遠く県外からも来院していることがわかった。「列設布篤」は、院内処方に用いた薬剤の一覧表で、現在の診療報酬明細が記載されるレセプトとは異なっている。レセプトの変遷が見られ、興味深い。その表紙と記載内容の一部を図 5 に示す。

信玄病院の最盛期には、病棟 3 棟を擁し、看護婦を 100 人余り抱える大病院だったようである[12]。館長湯浅大司氏によれば、病院の周りには旅館、商店が軒を連ね、一つの町が形成されたごとくであったという。牧野は病院経営の傍ら、東三電気株式会社の設立、私設牧野図書館の開館、など地域発展のために多くの事業推進した。郷土の研究にも注力し、長篠古戦場顕彰会を設立し、その意思は現在も受け継がれている[13]。

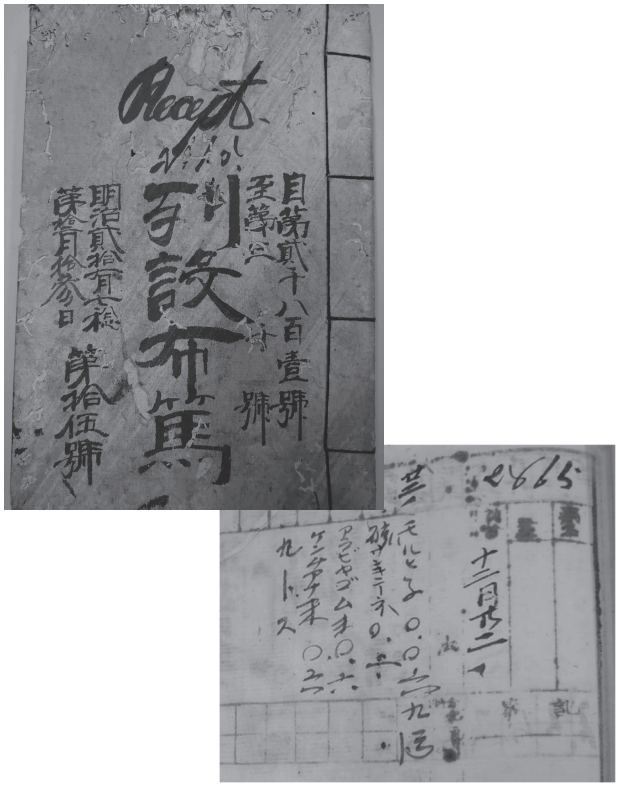

図５：明治 27（1894）年信玄病院発行
列設布篤（レセプト）
画像提供：新城設楽原歴史資料館

Ⅴ．患家の視点から考察した近代地域医療の形成

これまで、地域医療の研究は、そのほとんどが医家の視点で論じられており、地域住民の姿は見えてこなかった。元々医療関連資料が高額であることに加え、診療に関わる書類は病院経営に関わる重要書類であるため、比較的良い状態で発見されることが多く、医家の資料で考察せざるを得ない状態であることもその理由のひとつであるといえよう。

2019 年 9 月に小寺家に伝来する明細書ほか、種痘証明書、当家で使用されていたと思われる健康食品の啓発書、日誌に表れる医療行動の記録などが確認できたことから、医家の視点で地域医療を考察することが可能となった。

本章では、明細書や各種資料と小寺家日誌の記述との比較から、西洋医学受容の様子をみていくこととしたい。

1．小寺家日誌にみる患者と家族の行動

日誌についての詳細は拙稿「小寺家文書にみる明治後期の地域医療（1）－日誌から読み解く患家の医療行動－」に記しているが、本稿に関する内容を一部引用する。

弓之助やその家族で書き継がれた日誌は、明治 39（1906）年 9 月から昭和 16（1941）年 5 月まで 19 冊が伝わっている。日常の出来事や年中行事、冠婚葬祭、外出記録、買い物品、村内の動向、自然災害などが日を逐って詳細に記され、巻末には金銭出納表がある。これらの日誌は、小寺家の活動のみならず、当時の世相や暮らしも知ることができるものとなっている。衛生・医療に関する記事では、明治 41（1908）年だけでも、村での種痘、トラホームの検診、通院、医業の開業、薬の購入などの記事がみられた。もちろんＡの入院時の記録も記されており、明細書と突き合わせての検討が期待される。

本稿では、特に患者家族の支援行動に注目し、西洋医学受容に患家がどのように関わっていたかを考察する。以下に日誌の一部(翻刻)を示す。原文は縦書き、下線は筆者による。

【資料 5】
七月五日　晴天　日曜
一、本月三日日比力弥ヲ頼ミ大垣町吉益病院ニ入院セルＡへ蒲団二枚、蚊帳一張、白米二升、シヤガタラ芋少々ヲ送リタリ、其賃銭九銭、今日Ａヨリ単物等戻シ来レリ

【資料 6】
七月九日　曇天　木曜
一、西脇友ヲＡノ介抱人ニ頼ミ沢田マテ見送リ行ケリ、小使銭トシテ金二十五銭ヲ友ニ渡シタリ

【資料 7】
七月十一日　曇天　土曜
一、本日Ａカ大垣ノ吉益病院ニ於テ手術ヲ受ルヲ以テ同所へ出張セリ
一、Ａハ大手術ヲ受ケタリ
一、西脇つうヲ頼ミ泊リ貰ヒタリ

【資料 8】
八月十三日　雨天　木曜
一、Ａノ病気見舞トシテ渡辺辰弥・小川初次郎・三輪久次郎ノ三名ヨリ各砂糖袋一個宛、西脇安次郎・川地枡吉ノ二名ヨリ各菓子袋一個宛、土居儀左衛門方ヨリ菓子箱一個、立木喜久弥方ヨリをはき一重、

西脇孫三郎方ヨリ温飩ヲ貰ヒ受ケタリ
一、立木喜又方ヨリＡノ病気見舞トシテ菓子箱一個貰ヒ受ケタリ

【資料5〜7】は入院から手術までの患家の行動をよく表している。まずＡの入院に際し、西脇友という人物に付き添い(介抱人)を依頼している。なお、この人物は「つう」「おゆう」「友」など表記の揺れがあり、正確な名前はわかっていない。しかし、西脇孫三郎という人物が大正7(1918)年9月7日、当主弓之助に書状を届けており、そのなかに「曽我次郎氏は今7日午後4時梅田駅通過との電報あり、おつうも面会に罷り越すのでご承知下されたい[14]」とある。この「おつう」が西脇つう(友)であると思われる。孫三郎がＡの見舞いとして饂飩(うどん)を届けているところから、懇意にしている間柄であったのだろう【資料8】。地域住民が術後の付添いをするほど西洋医学が浸透し、理解が進んでいたものと思われる。【資料5】では、療養中のＡにさまざまな物品を送った旨の記載があるが、そのなかにジャガイモ(シヤガタラ芋)がある。現在でもジャガイモは大腸手術後に消化の良い食品として推奨されており小寺家の人々が栄養学、西洋医学の基礎知識を持っていたことが推測される好例である[15]。

【資料8】は、入院見舞いの様子であるが、甘味、麺類であるところが興味深い。「貰ヒ受ケタリ」とあるのみなので、当該人物が見舞いに来院したものかは不明であるが、地域医療に付随するコミュニティの形成がみえる。

【資料9】
七月十七日　晴天　金曜
一、Ａノ病気視察トシテ午后四時ヨリ大垣へ行キタリ

【資料10】
八月十二日　雨天　水曜
一、西脇友輔方へ薬価トシテ四円四銭ト謝礼五十銭、都合四円五十四銭仕払タリ
一、Ａ義入院中ニ送リタル荷物ヲ大垣ヨリ戻セシ賃銭二十五銭ヲ日比力弥へ仕払タリ

【資料9】は弓之助が術後の様子を「視察」した旨の記載である。「視察」という言葉から、単なる見舞いではないことが推測される。術後の経過、今後の治療方針、退院の見通し等を主治医である吉益雄太郎が説明したのであろう。その折に弓之助は病院職員に付け届けなどもしており、西洋医学に一定の信頼をおいていたことがわかる。【資料10】は、退院後の動きである。西脇に謝礼を支払っているところから、おそらく西脇が吉益病院を紹介したものであろう。吉益は古好堂の大野啓一郎や馬渕良三とも交流があり、同時期に院長に就任していることを考慮すれば、西脇が古好堂と何らかの関係があったことも考えられ、大垣市の地域医療が西洋医学を基盤として形成されていった過程が示唆される。また、薬価の支払いを行っているところから、西脇が退院後の外来フォローアップを担当したことがわかる。

2. 明細書にみる西洋医学受容の様子

小寺家が受け取った明細書には、治療内容、使用した材料、費用徴収の方法、会計時期等多くのことを読み取ることができる。本項では、明細書に表れる西洋医学受容の様子を考察する。以下に明細書の一部(翻刻)を示す。原文は縦書き、下線は筆者による。

【資料11】
【請求番号9-103-10、分類番号Ⅲ-5-(3)-11】
明治四十一年六月　小寺せい　殿 薬価及手術料明細書
日／種目　種別　料金
自十九　日至二十三日　　薬価　壱円〇八銭
自十八　日至廿四　日　　入院料　壱円〇五銭
自　　日至　　日　牛乳弐升一合代 七十三銭五厘
自　　日至　　日　　〃弐円八十六銭五厘
自　　日至　　日内壱円五十一銭五厘　先分預り分
自　　日至　　日
差引金壱円三十五銭(領収印)　〔鉛筆書き〕「十七銭残り」
明治四十一年六月廿四日　　岐阜県大垣町　吉益病院

【資料3,4】【資料11】に牛乳を購入した旨の記載がある。小寺家は入院期間中購入を続けているが、牛乳は明治期にはまだ受け入れられていなかった。東四柳(2017)によれば、乳製品の特徴、医学的効能は紹介されていたものの日常生活での積極的な利用に言及するものはほとんどない状態であった[16]。このような状況下にあって、小寺家では経常的に牛乳を摂取していたようである。また、小寺家文書には「鶏肉ケレー」の効能書[8]が伝わっている。ケレーはオランダ語の「gelei」で、滋養強壮エキスのような

ものであったようだ。効能書には、有効成分、効能、医学博士の推薦文等が書かれているが、西洋医学に理解がなければとても摂取する気にはなれなかっただろう。

Ⅵ. おわりに

1. 研究のまとめと研究の限界

本稿では、現在確認できる医療関連資料を参照しながら、「医家」「患家」の両視点から近代地域医療形成の様子を考察した。その結果、近代地域医療の形成には以下の 4 点の特徴があることが示唆された。

1）西洋医学の受容は明治 40 年代にはできており、現代地域医療の基礎ができた。
2）明治期に病診連携、紹介（診療情報提供）は行われており、それにより地域ネットワークが形成されていた。
3）インフォームドコンセント、ＢＳＬ（Bed Side Learning）、明細書の発行を通した現金による会計など、現代においても重要な事柄がすでに実施されていた。
4）地域住民は、西洋医学の重要性を理解し、受け入れており、生活様式などにも取り入れていた。

しかしながら、取り上げたのは数例の資料であること、資料の読み込みが足らないことから、推測に留まっている部分も多い。また、東海地方全体の様子を考察するには至らなかった。

2. 展望

今後は、東海地方に分散する資料を整理統合し、東海地方の地域医療形成の過程を解明し、現代における地域医療の在り方を提言していきたい。

付記

本稿の執筆分担は以下の通りである。
黒野：Ⅰ-1　Ⅱ-1,2　Ⅲ-2,3,4　Ⅳ-3,4　Ⅴ-1
石川：Ⅱ-3　Ⅲ-1　Ⅳ-2
大友：Ⅰ-2　Ⅳ-1　Ⅴ-2
Ⅵは共同で執筆した。
資料翻刻はすべて石川が担当した。

注

(1) 以下の記述は、石津町教育委員会(2004)『新修上石津町誌』pp. 196～199、pp. 572～578、上石津町(1979)『上石津町史　通史編』、pp. 383～384を参考にした。
(2) 大垣市編(2013)『大垣市史　通史編　自然・原始～近世』pp. 884～886
(3) 上石津町編(1975)『上石津町史　史料編』339 号文書
(4) 好古堂の塾生であった馬渕良三の使用していたノートの表紙に記された一文である。以下の記述は、天野晴子編(1988)『明治の医塾生・馬渕良三日記』および「明治の医塾生　馬渕良三日記」http://blog.livedoor.jp/amano_kiyoko/(2019 年 12 月 2 日取得)を参考にした。
(5) 小寺家文書(個人蔵)13-24～28
(6) 小寺家文書(個人蔵)6-4
(7) 信玄病院が処方した薬剤の原簿である。「禮施布篤」と表記することもある。その例が栃木県さくら市にあった喜連川病院に伝わっている。ともにレセプトの当て字である。明治期は漢字の使用に現在のような厳格なきまりがなかったようで、小寺家日誌にも盲腸炎を「朦腸炎」と表記した例がある。
(8) 小寺家文書(個人蔵)16-67

引用文献

1) 新村拓(2006)『日本医療史』吉川弘文館、 p. 226
2) 竹原万雄(2006)「近代日本における新医療導入をめぐる相克と克服」医療科学研究所『医療と社会』Vol. 15 №3、pp. 39－40
3) 当銘寿夫(2020)「自粛警察「執拗すぎる相互監視」を生む根本要因」東洋経済 ONLINE 2020/06/14 https://toyokeizai.net/articles/-/356399 2020 年 11 月 20 日取得
4) 青柳精一(1996)『診療報酬の歴史』思文閣出版、pp. 203－204
5) 神立春樹(1985)「明治後期の岡山県一農村における農村民の生活事情―日本産業革命期の地域民衆生活の検討―」岡山大学経済学会『岡山大学経済学会雑誌』17(1)、p. 13
6) 「明治の医塾生　馬渕良三日記」http://blog.livedoor.jp/amano_kiyoko/　2019 年 12 月 2 日取得
7) 森納(1982)「吉益四峰(今井鉄太郎)の家系について」日本医史学会『日本醫史學雜誌』第 28 巻第 2 号、pp. 126－127
8) 茂木藏之助(1942)『蟲垂炎』南山堂、pp. 10－13
9) 新修上石津町史編纂委員会編(2004)『新修上石津

町史』上石津町教育委員会、p. 575
10)岐阜県編集(2002)『岐阜県史』p. 627
11)辻下栄一編(1985)『上石津　ふる里のむかしうた』上石津町教育委員会、p. 93
12)新城市ホームページ
https://www.city.shinshiro.lg.jp/kanko/hito/makinobu
nsai.html　2019 年 12 月 20 日取得
13)寺澤安正(2015)「東三電気株式会社の設立者　牧野文斎」日本電気協会中部支部『中部のエネルギーを築いた人々』
14)小寺家文書　Ⅲ 近代　06　書状　(52)西脇孫三郎小寺 8-232　小寺家文書　個人蔵
15)高野病院栄養科編『腸手術後の食事療法』高野病院、pp. 2－4
16)東四柳祥子(2017)「明治・大正期における「牛乳・乳製品」論の系譜～見直されたその価値と摂取意義～」一般社団法人Ｊミルク『メディアミルクセミナーニュースレター』№45、pp. 1－4

参考等文献

・青柳精一(2011)『近代医療のあけぼの』思文閣出版
・石川寛編(2012)『小寺家文書目録』名古屋大学附属図書館・附属図書館研究開発室
・石川寛(2019)「近代における高木家文書の調査と活用」『名古屋大学附属図書館研究年報』(16)、pp. 36－25
・井上淳(2004)「幕末期在村蘭方医の医療と社会活動:清家堅庭の足跡(第二部　蘭学の地域的展開と交流」国立民俗博物館『国立民俗博物館研究報告』第 116 集、pp. 127－154
・江藤文夫(2019)『医療と日本人』医歯薬出版
・岡山寧子(2017)「京都同志社病院機関紙『おとづれ』－第 1～3 号(1893 年)の記述内容－」同志社大学『同志社看護』Vol. 2、pp. 29－35
・黒野伸子、石川寛、大友達也(2020a)「小寺家文書にみる明治後期の地域医療(１)－日誌から読み解く患家の医療行動－」日本レセプト学会『レセプト論考』第 2 号
・黒野伸子、石川寛、大友達也(2020b)「小寺家文書にみる明治後期の地域医療(２)－明細書から読み解く明治後期の医療費－」日本レセプト学会『レセプト論考』第 2 号
・坂井健雄(2019)『医学教育の歴史　古今と東西』法政大学出版局
・塩原佳典(2017)「明治前期における公立病院の興亡－長野県松本地方の医療環境をめぐる「公」の行方－」国際言語平和研究所『研究論叢』第 89 号、pp. 1－25
・辻下栄一編(1984)『上石津の人物史　明日を拓いた人々』上石津町教育委員会
・多留淳文(1995)「北陸における東洋医学の史的展開」日本東洋医学会『日本東洋医学雑誌』第 46 巻第 3 号、pp. 355-369
・西沢いづみ(2019)『住民とともに歩んだ医療　京都・堀川病院の実践から』生活書院
・平澤繁太郎(1902)「イヒチオールに就いて」工業化學会『工業化學雑誌』第五編第五拾四號、pp. 577－580
・福井敏隆(2004)「幕末期弘前藩における種痘の受容と医学館の創立」国立民俗博物館『国立民俗博物館研究報告』第 116 集、pp. 75－90
・富士川游(1974 初出)『日本医学史綱要１』平凡社
・富士川游(1974 初出)『日本医学史綱要２』平凡社
・藤田直市・東丈夫(1937)「莨菪根と其の類似品に就いて」日本薬学会『薬学雑誌』57 巻 7 号、pp722－733
・矢数道明(1969)「跡尋社長　吉益四峰の業績について」日本医史学会『日本醫史學雑誌』第 15 巻第 3 号、pp. 39－40
・山崎穣平(1856)「日知録」佐藤常雄編(1994)『日本農書全集第 42 巻(農事日誌１)』農山漁村文化協会収載
・吉益雄太郎(1930)「急性腹膜炎療法ノ批判」京都帝國大學醫学部外科整形外科學教室『日本外科宝函』7、pp. 632－661

謝辞

文書閲覧を快く許可してくださり、研究に対する多くの示唆をいただいた現小寺家当主小寺登様、ご家族様、設楽原歴史資料館湯浅大司館長、研究遂行に関し終始ご協力くださった上石津郷土資料館、各務原市歴史民俗資料館の皆様に感謝するとともに、厚く御礼申し上げます。

また、現代医療、現代の虫垂炎治療についてご教授いただいた藤田医科大学消化器内科学Ⅰ尾﨑隼人先生に感謝するとともに厚く御礼申し上げます。